

メキシコ・グアテマラ国の衣服文化の研究 (第2報)

— 織物および繊維素材について —

山本良子

(平成元年9月30日受理)

A Study of Clothing Culture in Mexico and Guatemala (Part 2)

— On the Textile Fabric and the Fiber —

Ryoko YAMAMOTO

(Received September 30, 1989)

I 緒言

民族衣裳の宝庫といわれるメキシコ・グアテマラに興味を持ち機会があって、1987年8月に同地方を訪ずれ研修をおこなった。その折りに収集した資料について解析をおこない、前報¹⁾につづき筆者は担当部門の織物および素材について調べた。

世界の各地には、それぞれの文化遺産がある。人々との交流によって、われわれの衣料も含めてであるが、文明開花と共に変化し、次第に失われてきている。それは当然のことで文明の発達でどこに行っても同じ様な服装となっている。

昔はその土地で得られるものを材料にして衣料を作ってきたが、文化の発達に従って交通が便利になり地球上の各地へ行くことが出来る。居ながらにして世界各地の変化も手に取るように既刻目にすることが出来る。めずらしいもの、便利なものを取り入れることが可能である。

そうした中にも未開のところは今でも世界にはいくらかもある。しかし文明の恩恵を受けながらも、頑なに今尚昔ながらの服装形態を維持している民族が居る。それがグアテマラである。グアテマラは中世と現代が同時に共存しているおもしろい国である。

メキシコ・グアテマラにおける民族衣裳の研究は先人^{2)~4), 7)}らによっていろいろとおこなわれているが、筆者らは現地において一部インディオの実際の生活を見学し、そこで得られた資料にもとづいて調査研究を行い分担領域の知見を得たので報告する。

II 研究方法

服飾美術科

1. メキシコ・グアテマラにおいて収集した資料の織物および原料について調査検討を行った。

2. 織物については、特にグアテマラの多彩な織の技法に関する検討を行った。

3. 原料の綿の繊維(茶綿)については、栽培を実際に行った。

4. 購入してきた茶綿・茶綿糸(写真1, 2)および栽培により収穫した米綿種白綿繊維の分析について、繊維長の測定、繊維の形態の顕微鏡視察、天然燃りの比較、色相の測定、赤外吸収スペクトルの測定等を行った。

試料の調整は四塩化炭素に浸漬し油脂分等の抽出を行って用いた。

色相の測定は、日立323型自記分光光度計で反射率を測定し、三刺激値(X, Y, Z)、色座標(x, y)、マンセル記号(H, V, C)は、SM-カラーコンピューター(スガ試験機製)により測定した。

赤外吸収スペクトルの測定は、試料1mgとKBr 100mgを混合粉碎した後錠剤法により日立赤外吸収スペクトル215型を使用し測定した。

III 結果および考察

1. 収集試料織物および原料の調査

メキシコ・グアテマラで製織されている織物の種類は地形的影響に左右され、低地の湿度の高い地域のもは、多くは、薄地織物で平織組織、緞組織(紗, 絹, 羅)のもので写真3, 4, 5の如きものが作られている。高地の気温の低い地域では、厚地織物で平織組織に縫取り織、綾織、綴織、などで写真6, 7に見るような色彩豊かな織柄のものである。

原料の繊維については、木綿繊維が大半を占めている



写真1. 茶綿原料



写真2. 茶綿糸

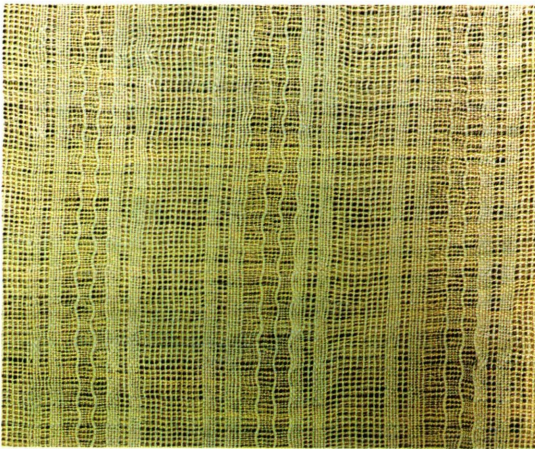


写真3. 紗・混合織(茶綿)



写真5. パイル織と織り文様

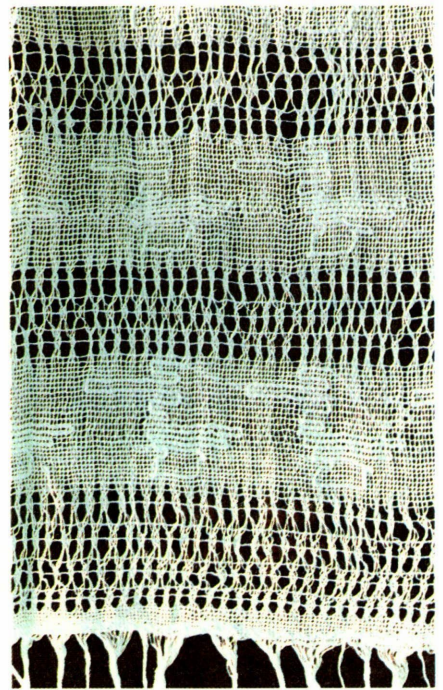


写真4. 綾織(羅)



写真6. 茶綿地に絹糸の紋様地



写真8. 後帯機



写真7. 絹糸使いの三連綴織地



写真9. 高機



写真10. 茶綿の栽培

現在使用されている綿糸は、殆んどが近代工場で作られる20番から40番の紡績糸で化学染料で染められている。綿の栽培は、大平洋岸の低地で古くからおこなわれていて、現在は品質の良い綿が生産され日本向けの輸出品でもある。この白綿のほかにクヌスカーテまたはイシカコと呼ばれる茶色のもの茶綿がある。これは品種的には野生に近いものである。

木綿については羊と山羊の毛が用いられる。毛織物の製造は現在は男性の仕事として企業化されていて、この用途は男性用の上着、ズボン、手編のボルサ（袋）、前掛け風織布（ポンチート）、毛布、女性用では帯、頭髪飾用の太い毛糸、織物の文様糸、最近では腰布などとして用いられる。比率は木綿に比べて非常に少ない。

絹繊維は、メキシコで山繭がとれたという記録があり養蚕も行われた記録があるがグアテマラでは殆んどがスペイン征服以後の輸入品で値段も高く貴重な材料で、文様糸として使われ、高貴な織物としてイメージされていた。

その他の材料は、竜舌蘭の葉から採る繊維でエネケンと呼ばれるものがある。この繊維もいろいろの用途に用いられていた。現在はロープやハンモック、袋物に利用されている。

2. 織りの技法

織り方そのものは、原始時代から今日まで、たて糸とよこ糸を組合わせる、その組み方（組織）によって各種の構造のものが織り出されるわけで手わざから簡単な器具を用いて構成することが考えられ、たて・よこの糸1本1本を丁寧に組み合わせることで布状とした先祖の知恵と技は本当にたいしたもの、それを現代まで伝承し、現代文明社会の中で、中世時代の織り技が今も生き続けていることは興味深いものである。

織機は、グアテマラに於いては、Tela de Palitos（棒切れ機）と呼ばれる原始的な地機、いざり機で英語名はBackstrap Loom 後帯機写真8、図1で織られる。しかも羅のような薄物の織りもこの後帯機を使って織られている。

高機 写真9、図2は、スペインが統治した時にもたらされたもので、巾の広い腰布用の緋の生地を織るのに用いられる。数は地機にくらべると少ない。これは現在主に男性が企業化して限られた地域で使用されている。その他に、綴の細紐を織る織機として小機がある。この機は

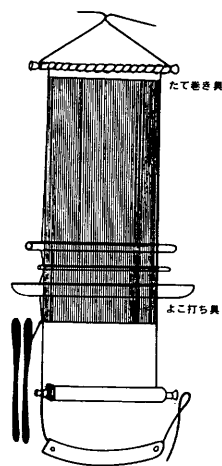


図1 後帯機略図

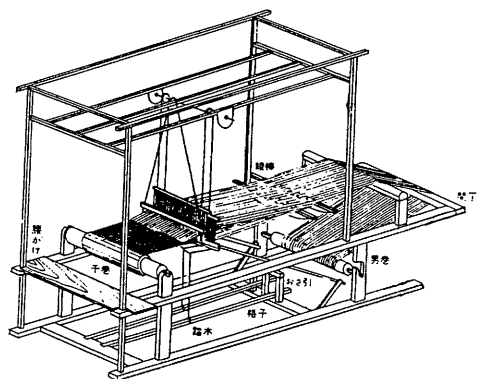


図2 高機略図

特色があって、グアテマラの細紐、帯の色彩豊かな幾何学文様を織り出すのにかかせないものである。簡単な機構ではあるが、熟練した若い女性の指先の技で変形自在の模様を作り出されるのである。

3. 茶綿の栽培

茶綿の栽培は、グアテマラ・ソロラの金旺市で売られていた実綿（種つきの綿）を購入したのから種子と繊維の分離をおこない同時に日本綿業振興会のプレゼント用綿の種（米綿種）とを同時季1988年春に播種し栽培観察をした。発芽をして花は咲いた(写真10)が結実には到らず、米綿種のみを収穫した。本年度も同様に播種し現在成育中で木は大きく成長したが、結実はむずかしいよう

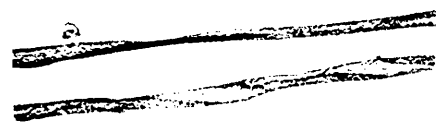
である。

茶綿は綿の品種の中では、野生のもので収獲量は少く、繊維の長さは短く、手紡ぎ用でなければ糸は作れず、工業的な価値は低いものである。グアテマラでも高地に住むインディオが栽培しており、その地域における気候風土に適したもので、東京の土地には適合できず、収獲出来ないのが、残念である。日本でもこの茶綿の栽培をしている事を聞いてはいる。

茶綿は素材としての工業的価値は低いが、染料等なかった時代には、この着色した色合が、白色の綿そのものとは異なる趣きがあって好ましく、色の堅ろう度もよく、素朴な味わいがあり現代でも通用するもので魅力的でもある。



(a)



(b)

4. 茶綿および綿の科学的考察

4-1 茶綿の繊維長

綿花の分類を繊維長で分ける^{5) 6)} ことがあり、一般に栽培される綿は、

- 長繊維 主にエジプト綿 28.6～38.1mm
- 中繊維 主にアップランド綿 22.2～27.8mm
- 短繊維 主にアジア綿 20.6mm以下

であるのに対し試料の茶綿は、15.0～18.5mmであった。市場に於いて取引される短繊維長のものに比べ更に短く、これでは手紡ぎによる以外にはなく現代企業においては商品価値のないことがわかる。現在の市場動向は、高級品化に向けて、綿の木の種類改良により超長繊維の生産に凌ぎをけずり細くて長い高級綿の栽培と供給がされている。

4-2 繊維の形態特長

繊維の形態は顕微鏡写真11の(a)(b)に示す通りで、綿の特長である天然撚の数が、茶綿の方が多く、明瞭に撚回しているのが見られる。このため繊維長が短くても糸に紡ぐのにしっかりと絡み合い手紡ぎにより丈夫な糸の形成に役立っているものと考えられる。

4-3 色相

色相の測定結果は、図3に示す通りで米綿種白綿の反射率は、やや黄味を帯びた白色である。茶綿は合成染料等で染色された着色物の色相の如きピークを持たず、天然色素特有の反射曲線を示めた。また三刺激値(X, Y, Z), 色座標(x, y), マンセル記号(H, V, C)は表1に示す通りで、茶綿のマンセル記号を見ると赤味の強い黄色(褐色)の結果を示めている。

写真 11. 顕微鏡写真図

倍率 150 ×

(a) 茶綿

(b) 栽培白綿

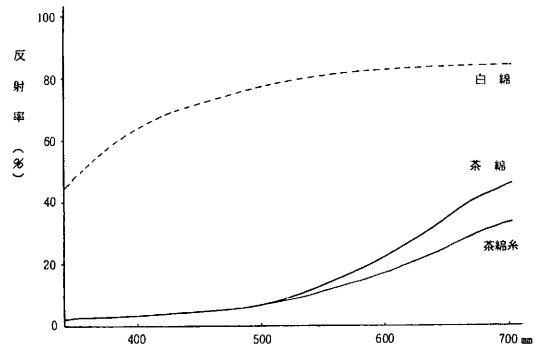


図3 分光反射率曲線

表1 茶綿および白綿の測色値

項目	X	Y	Z	x	y	H	V	C
茶綿糸	13.21	11.60	5.37	0.4377	0.3844	6.66 YR	3.94	4.76
茶綿	15.61	13.31	4.96	0.4607	0.3929	6.22 YR	4.19	6.02
白綿	65.21	67.10	71.35	0.3202	0.3295	6.42 Y	8.43	0.73

4-4 赤外吸収スペクトル

赤外吸収スペクトルの結果は、図4に示す通りで、栽培した米綿種白綿においては綿の吸収スペクトルと同様の吸収を示したが、茶綿の場合は 1430 cm^{-1} 付近の吸収、 1060 cm^{-1} 付近の吸収は顕著には見られず、特異な吸収が示めされた。

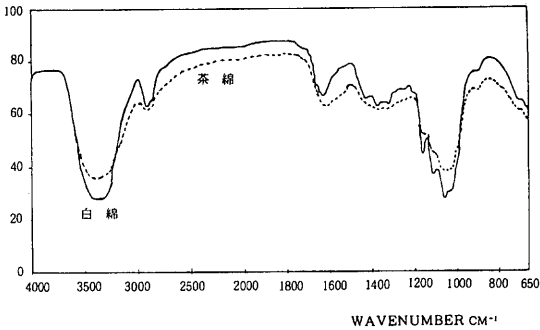


図4 茶綿および白綿の赤外吸収スペクトル

IV 結 言

メキシコ・グアテマラ国の衣服文化研究の一環としておこなった織物および繊維素材についての調査研究と実験的検討により得られた結果は、織物の構成技法については、現代社会における高速度ハイテクの世の中とのかわり合いと離れて、各民族毎に独特の色彩基調色、伝統の文様を織り込んで、素朴に昔ながらの技法を用い原始的な後帯機を駆使して、家族の衣服の製作とごくわずかに収入を得る手段として製作したものを市場に持ち寄り互に売買をする自給自足の生活を今なお実践している状況を実際に目にすることができ有益であった。

繊維素材については、現在は工場生産された綿をはじ

め化学繊維の染色糸を購入して使用していることがわかったが、このほかに昔ながらの方法で栽培利用している茶綿を入手したので、この性状に関し、分析データが殆んどなかったので、ごく一部の性状解析ではあったが解明することができた。

古代の裂地に関して遺跡等から発掘されたものを研究しているが、有機物である裂地は完全な形態のものは少く全体を推測することしかできない現状であるが、技術的なものに関しては、グアテマラは、「貴重な織物の宝庫」といわれるだけに、織りの技術を研究する上で貴重な遺産を数多く残しており、参考となるものが多く今後の研究の上にも大いに役立つものである。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、試料の提供並びに解説に懇切な御指導を賜りました児島英雄氏をはじめ、測定にご協力くださった松山実験助手、その他多くの方々のご配慮に対し感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 中里喜子: 東京家政大学紀要 29, 195 (1989)
- 2) 児島英雄: 染織の美 28, 京都書院(京都), 1984
- 3) 稲村哲也: メキシコの民族と衣裳, 紫紅社(京都), 1983
- 4) 京田 誠: 装飾デザイン4, 学研(東京)1983, P. 74~77
- 5) 大野泰雄: はじめての綿づくり, 木魂社(東京), 1983, P. 25
- 6) 馬場耕一: コットンの世界, 日本綿業振興会(大阪), 1988, P. 20
- 7) C. L. PETERSEN: MAYA OF DE GUATEMALA, 1・2・4・6, Museo Ixchel, 1975.